

オリンピックに見た今昔物語

下掲の枠内に記したランキングは何の順位だと思いですか。北京オリンピックを TV 観戦していて、「昭和の頃は(札幌オリンピックが昭和 47 年)は、スキーやスケートが氷上や雪上を滑る道具だったのに、飛んだり跳ねたり宙返りするの
が中心になってしまったなあ」と感慨にふけていた際に「待てよ、日本人の名前も昭和の頃と比べると随分変わっているんじゃないのか」と思って、インターネット「日本選手名鑑(オリンピック)」から、フィギュア 6 名、スピードスケート 8 名、
ショートトラック 3 名、カーリング 5 名、スノーボード 11 名、スキージャンプ 4 名、アルペンスキー 2 名、距離スキー 4 名、
フリースタイルスキー 6 名の、アイスホッケー 23 名、バイアスロン 4 名の計 76 名の出場日本人女子選手のファーストネームに用いられている漢字の使用頻度のランキングを纏めてみたものです。

1 位 美 7 人	2 位 香 6 人	3 位 菜・子 5 人
5 位 希・里・沙 4 人	8 位 花・恵・奈・那・知・織 3 人	

“mi”や“bi”の音に充てられる「美」をはじめ、“ka”や“ki”に充てられる「香・花・希」、「sa」に充てられる「沙」、「na」に充てられる「菜・奈・那」など、漢字が表音文字的に多く使われるようになってきている感じですね。古くから高貴な女性につけられてきて、昭和の時代にも、親が子供に愛情表現して、一番最初に贈るプレゼントとして命名に最も普通に使われていた「子」はすっかり落潮してしまっていて、僅かに、アルペンスキーの向川桜子選手、距離スキーの石田雅子選手、フリースタイルスキーの富高日向子選手、アイスホッケーの小島由紀子選手とバイアスロンの立崎美由子選手の 5 名が、それぞれ目立たぬところで「子」を付けて“くださっていた”だけでした。これから、愛子様による女系天皇の御代だというのに(?)。出場日本人男子選手の方には、昭和の時代に日本に 500 万人いると言われていた「ヒロシ(博、弘、宏、寛、洋等々)」が一人もいないんですよ。まさに「昭和は遠くなりけり」ですね。

名前と言えば都市名「北京」も「ペキン(Peking)」ではなくてすっかり「ベイジン(Beijing)」に統一されていましたね、国際的には。それはそうでしょう。昭和どころか明治時代に当たる清朝後半より広まった現代中国語で“Beijing”と発音されるようになって、それが定着しているのですから。日本は昭和 47 年に日中国交正常化した際に「自国読みで構わない」で合意されたのに甘えて自国読み“ペキン”で通してきているだけなんです。まあ、北京大学は“Peking University”、北京ダックも“Peking duck”のままですし、ロシア語で“пекин”：発音ペキン”、スペイン語でも“Pekin”ですから、日本だけのガラパゴス現象だとは言えませんが、「ペキン」は東京にとっての「江戸」みたいなものですから、日本人もいい加減に「ベイジン」読みで切り替えなければ、「東京を江戸読みするヘンな外人」と同じように見られてしまうかもしれませんね。

北京オリンピックのスキー・スケートボード会場のゲレンデづくりも見事なものでしたね。北京は秋田とほぼ同緯度ですから、積雪地帯でスキーとスケートボード競技が行われると思っていたのですがこれがとんだ大間違い。北京は、もともと内陸性気候で積雪量が少ない地域だったんですね。第一に、近くに海がない北京では、雪の元となる水滴の量が少ないので、必然的に降雪量が少なくなるのだということ。その上、北京には標高の高い山がないので、風に乗った水滴が山にぶつかって、山の斜面を駆け上がって空へと上昇し、その水滴が冷えて雪に変わるという自然環境ではないのだそうです。1998 年に冬季オリンピックが開催された長野県と言えば、多雪地帯と思われがちですが、その中の松本市に関しては同じく内陸性気候と地形の関係で積雪量と降雪量が少ないのだそうです。ですから中国は、松本市と同じように積雪の自然環境のないところに人工的な環境を設けて冬季オリンピック会場を設営したわけですね。

テレビ放送で見事に整備されたスキー競技場の映像を見て私は中国も「昭和は遠くなりけり」と同じ状況にあるのだと強く実感しました。その昔に万里の長城を築いた中国は、労力を用いて大規模な造作を行なうのが上手だったのですが、ここに動員されているのは昔の中国を支えていた労力ではなくて技術なのだということが見て取れたからです。実際に調べてみると、気温や湿度に合わせ自動で造雪を最適化するシステムが採用されていて、地元の貯水池から北京郊外の標高 800m の高地に汲み上げられた夥しい量の水が「スノーガン」と呼ばれる人工降雪機約300基により圧縮空気と混ぜられ空気中に放出されてできた雪が「スノーキャッツ」と呼ばれるトラックのような車両で深さ最低 5cm の条件を保ってゲレンデなどに広げられるのだそうですね。しかも雪質には神経を使うアスリートの不安を取り除くため、硬い雪と柔らかい雪がまばらになりがちな人工雪の雪質を均一に保つ品質保証の活動が施されていたようです。また、周辺の山の生態系を損なうことなく、造雪機は再生可能エネルギーで駆動しており、人工雪として使用した大量の水は春の雪解けで地元の貯水池に戻るというように環境保全に対する配慮もされていたというのですから、今回の北京オリンピックはまさに技術立国を果たした中国だからこそ成就できた偉業だったのではないかと思います。

私が初めて中国を訪れたのは昭和末年から 8 年経った平成 8 年(1996 年)のことでした。当時の北京は昔ながらの“人海の街”で、道路上は自転車で満杯。僅かに普及しだした自動車がクラクションを鳴らしながら自転車の波をかいくぐって進んでいる状態でした。しかし、時あたかも「IT革命」勃興の時、インターネットを中心としたIT革新と、これを用いたグローバル・ロジスティクスの革新によって、アメリカを頂点とし中国を「世界の工場」とする新しい世界経済の秩序が急速に出来上がり始める時期だったんですね。私たち三井業際研究所のメンバーが訪れた北京の大学でも教授の先生方が「最近では優秀な学生が日本を飛び越えてアメリカに留学するようになった」と口を揃えて述べておられました。ほぼ同じ時期に、三井業際研究所の一員として訪れたアメリカのMITでも、構内の至る所に様々な「中国研究会」という貼り紙が貼りめぐらされていました。MITの教授連にも熱心で訪中を重ねておられる方が多く、なかにはビザなしで中国に入国できる教授までおられたのには驚きました。現場に立って、「日本の頭越しに、中国とアメリカが接近し、日本が取り残されてしまうのではないか」ということを現実味をもって感じたものでした。

その後はご存知の通り、アメリカからのビジネスの四流(商流、金流、物流、情流)の流入を得て、中国の経済伸長率は驚くばかり。ヨーロッパや日本の企業も次々と中国大陸に進出して行って、中国は文字通り「世界の工場」となる過程で自国の技術力も強化して輸出力を高めて、中国製品をアメリカ市場にまで進出させるほどになりました。アメリカが育てた形の中国の工業が勃興して中国製品がアメリカ市場にまで大挙進出してきたのに恐れをなして中国バッシングに走っているアメリカの姿は、昭和の時代に津波のような勢いでアメリカ市場に進出した日本産業をバッシングしたアメリカの姿にかぶります。日本と違って経済力の勃興に伴って軍事力が強化してきた中国のことですから米国政府の中国に対する警戒感が高まり中国を敵対視するに至りました。1991年に崩壊したソ連に成り代わって中国が世界の冷戦構造のアメリカの対峙国となっているのですから、美しい人工雪の映像の裏には大きな世界政治経済構造の変化が潜んでいるということを見落としてはいけないということなのでしょうね。この大きな世界的構造変化が進んでいる最中に日本の政治経済界のリーダーがしてきたことと言えば、「IT革命」が起こったことも意識せず、アベノミクスなるインチキ経済学を錦の御旗として掲げ、「デフレ」だとか「長引く不況」などといった表層的な物の見方のもとに当座を凌いでくることだけでした。そして、当然の結果として、これも訳の分からない「失われた十年間」が空しく、いつしか「失われた二十年間」に代わるだけのことでした。私は東芝定年退職後生涯一日本語教師の道を歩んできたのですが、2000年代前半には「技術先進国・日本」にあこがれて来日した外国人研修生が圧倒的に多かったのですが、2000年代後半には一人もいなくなっており、「漫画とアニメが面白い」が日本の誘因になっていたんですよ。北京オリンピックをTV観戦しながら、「日本のおかれている位置を客体視することによって日本ならではの行き方を模索しなければ」と改めて痛感しました。